

令和6年度 第1回倉吉市青少年問題対策協議会

倉吉市小中学生の生徒指導上の実態等（いじめ・問題行動及び長期欠席等）について説明及び協議を行いました。

○日 時 令和6年8月20日（火）13時30分～15時

○場 所 倉吉市役所北庁舎3階A会議室

○内 容

1 開 会

- （1）開会あいさつ
- （2）自己紹介

2 協議会長選出

3 事務局説明

- （1）倉吉市いじめ防止基本方針等について
- （2）倉吉市小中学校の生徒指導上の実態の概要について
 - ①いじめ・問題行動等 ②長期欠席等
- （3）倉吉市の対応について（倉吉市生徒指導の取組）

4 協議

- （1）倉吉市小中学校のいじめ・問題行動の状況について
- （2）倉吉市小中学校の長期欠席等の状況について

【主な意見】

○いじめ・問題行動について

- ・令和3年度に減少傾向が伺えるが、新型コロナの影響は考えられるか。
- ・コロナが無関係とは言い切れないのではないか。関わり合いがない中で生活していたことは一定程度影響があるのではないか。
- ・コロナの影響は強くあったと考える。今まで、当たり前に行っていたことに制限がかかっていた。そのことを、多くの児童生徒が無意識に感じていた。大人は、仕方ないと考えていても、小さい子どもからすると受け入れにくく、そのストレスなどは上手に発散することができない状況。いじめについても、距離をとることで、いざこざが減ったとも考えられるが、コロナ禍を経て人間関係をつくるスキルが築けなくなったように感じる。
- ・昔のように屯する場所が少なくなってきている。
- ・さまざまな発達段階の中で、まだまだ思慮分別がつきにくい段階の中、万引きや窃盗が発生するケースがある。その中で、その児童生徒の背景が大なり小なりあるのではないか。心が満たされないものを抱えて学校に通っている子もあるのでは。なぜ、そのような行動をするのかという視点で見ていく必要がある。
- ・行動には背景があるということ。問題行動という言葉が苦手であるが、背景によって行動があるので問題行動という表現はどうかと思う。

- ・不安や無気力という状態の場合、なぜそうなるのかというアセスメントが大事である。
- ・児童生徒の状況把握の方法として各学校で「生活アンケート」を実施している。学校によって、名称等は様々であるが、学校ごとに作成し、アンケートに記入されている内容に合わせて対応していく。
- ・生活アンケートは、目に見えないところで子どもたちが感じていることをつかむというイメージ。つかんだ情報をもとに、早めに対応をしていく。それぞれの学校が定めている、いじめ防止基本方針にも沿って行っているものである。
- ・生活アンケートの取組はとても良い取組である。
- ・「hyper-QU」というアンケートも年間2回実施しており、児童生徒の状況を把握する機会をつくっている。

○長期欠席等について

- ・校内サポート教室の取組について成果はどうか。
- ・校内サポート教室は、学校には登校できるが、学級には入れない生徒の居場所となっている。自分の思いが語れるようになって教室に戻っていく事例や、支援員との話の中で進路がはっきりしてくる事例もある。
- ・校内サポート教室がない学校についても、倉吉市にはステップルームがある。支援員と担任が連携を図り、良い部屋を設置していただいている。
- ・「止まり木」のような場所となり得ている。
- ・学習についても取り組んでいるのか。
- ・プリントに取り組んだり、e-ラーニング教材に取り組んだりしている。担当教科の教員とも連携している。
- ・不登校の児童生徒（保護者）の中で、どこにもつながっていないような、つながりづらさのある場合もあるようであるが、そのあたりについてどうか。
- ・地域の力を活用することはできないか。地域の力で肯定感を高めてもらうような。
- ・学校のカウンセラーに適宜情報が入るようにすることで、つながりづらさの解消につながることもあるのでは。
- ・スクールソーシャルワーカーとの連携も必要。
- ・持続可能な取組を考えていく必要もあるが、子どもがSOSを出せる場所をつくっていくこと。
- ・学校に行かなくなると、勉強が分からなくなってくるが、地域の方に勉強を見てもらおうというのも考えられるのでは。「子ども食堂」で学習支援もしているという取組もあるようである。
- ・児童生徒の状況を把握するにあたって、保育園での姿、家の姿、児童館の姿など、姿は様々ある。それらの状況を共有する場があれば、一貫した対応ができると考える。
- ・学校が、安全安心な場所であってほしいと思う。不登校の出現率等を見ながら、なぜかを考えていく必要がある。学校だけでは難しい部分もあると思うが、地域とつながりながら、子どもたちが一歩でも前を向くようにしていきたい。
- ・地域と考えると、学校運営協議会、コミュニティスクールの活用を考えることはできないだろうか。